



o r a h o（おらは）とは、会津のことば。

「わたしの土地」「わたしの住んでいるところ」という意味です。

わたしの故郷、会津は山々に囲まれた雪国。

ここには、厳しい冬とゆたかな自然が育んだ文化があります。

会津で生まれ育ち、今は東京で暮らす一人の女性としての視線で、

昔からのいいもの、これからのいいものをご紹介しますと思います。

さあ、会津再発見の旅にでかけましょう。

C O N T E N T S



o r a h o v o l . 0 2

Cover Illustration:
Mitsushige Nishiwaki



特集

うるしのくにを訪ねて02



小特集

心に風が通る場所 ——森姫農園・雲の時間14



oraho by yamma sangyo

orahoとyammaの会津木綿 ①20



Slow Life, Slow Food.

山口英則さん（やますけ農園園主）22



ぐるり、ちいさな旅

会津本郷24



記憶が眠る場所

vol.1 原点 文・写真／栗原美穂26



忘れえぬ味

料理旅館 田事28

編集後記29

特集

うるしのくにを 訪ねて

山々に囲まれた会津。

ここには森がある。樹々がある。

そして樹とともに生きてきた人々がいる。

会津漆器の生産に欠かせない樹木・漆もそのひとつ。

漆をたどることは、会津をたどること。

そして、この国をたどること。



会津と漆のかかわりは長い。それは、はるか縄文時代にまでさかのぼる。

奥会津の玄関口・三島町の荒屋敷遺跡から出土した朱漆塗糸玉は、漆が塗られた苧麻（からむし）でできている。まるで当時の人々の祈りや思い、記憶を封じ込めているかのように、何十本もの糸が束ねられ、結ばれている。

そして、この遺跡では、漆を漉すための編地もみつまっている。漆の樹液を精製して使うという現代と同様の技術が、すでに2300年前の会津にあったのだという。紀元前から、会津は“うるしのくに”であったのだ。

時代は下って戦国期、この地を治めた芦名盛信が漆木栽培を奨励し、やがて蒲生氏郷により近江から木地師・塗り師が招かれて、漆器づくりの基盤が固まっていく。

漆は、江戸時代に重要とされた四木三草※のひとつでもある。樹液は天然の塗料として、漆の実はろうそくや髪づけ油の原料として重宝され、藩政を支えてきた。

戊辰戦争後、近代化の波に押されて漆栽培が衰退を始めると、会津藩蠟漆木取締役であった初瀬川健増が漆栽培の普及に奔走する。

その後、会津の漆器生産は効率重視の分業制が進み、大量生産が行われるようになった。漆器の一大産地として隆盛を極めたものの、戦後の高度成長期に大量生産に拍車をかけていった結果、柳宗悦や松田権六も嘆いていたように、会津漆器=安価な量産品というイメージが定着してしまった節もある。

しかし一方で、長い歴史が培ってきた本物志向のものづくりは絶えることなく続けられており、また伝統工芸の未来を切り拓くべく新たな取り組みも始まっている。

本当のことが知りたくて、うるしのくに・会津の“今”を訪ねた。

※四木三草……五穀(米、麦、粟、黍、豆)の次に重要とされた。

四木は桑、楮、茶、漆。三草は麻、紅花、藍

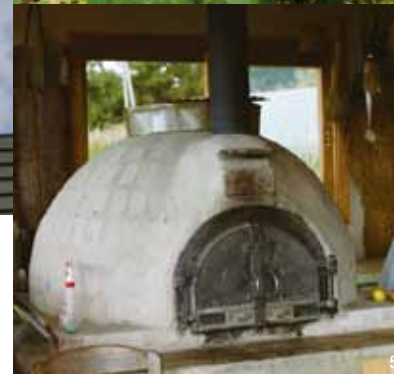


喜多方市熊倉町。広い空と大地に守られるようにして森姫農園はある。

この農園を守るのは児童文学作家の千世繭子さん。偶然訪れたこの地に一目惚れし、2000年に移住してきた。以来、4ヘクタールもの広さの畑を耕し、有機農法にこだわって、自給自足の暮らしを続けている。

平日は農作業に勤しみ、週末には収穫した農産物や果物や、それを素材にした手づくりケーキなどを販売。もともとは千世さんの執筆空間だったテラスを、美しい眺望とともにお茶を楽しむことができるカフェとしても開放している。

テラスの名前は、「雲の時間」。たなびく雲の隙間から差し込む光の筋を見ている時間は、心からしあわせを感じるひとときだ。



- 1：ちいさなちいさな農園への道しるべ。
- 2：たわわに実る森姫のりんごたち。
- 3：ひと口飲んで、その美味しさに目を見張ったりりんごジュース。
- 4：テラス外側の特等席。この景色を眺めていると、何時間でもいられそうな気がする。
- 5：農園自慢の石窯。堂々たる風格。
- 6：とれたての野菜を素材にした石窯ピッツアのワークショップも開催されている。
- 7：美しいブルーベリーの紫が映える手作りチーズケーキ。
- 8：凛々しいムーミンくんがお出迎え。
- 9：ここの農園では、かぼちゃもりんごもいい表情をしている。

ぐるり、ちいさな旅



会津本郷

やきものが盛んな本郷地区は、会津若松市と隣り合う会津美里町にあります。

400年ほど前に蒲生氏郷が播磨国（兵庫県）から職人を連れてきたのが、本郷焼のはじまりだそう。歩いてまわれる範囲内に窯元さんが集中しています。手びねり、ろくろ、絵付けの体験ができる所も多いので、散歩に陶芸体験に、やきものの町で一日を過ごしてみてもいいかもしれません。

アクセス：

会津若松からバスで35分、電車（JR只見線）で15分。

バスは1時間に1本くらい。電車は通学・通勤時間帯に限られるので、時刻表を確認のうえ、お出かけください。



本郷にやってきました。さっそく小径に入って、町を探索!

あちこちに窯元が点在している町内では、すぐにこんな風景に出会えます。

ユニークな蔵を発見! このあたり、昔の建物がたくさん残っています。

古い蔵を改装して作られたカフェ、yuinoba。現代の結(ゆい)の場です。

樹ノ音工房さんの白のぎと黒しのぎ。家に連れて帰ろうかな。



陶房彩里(いろり)さんは一番新しい窯元。ターコイズの器がおすすめ!

こちらは磁器を作っている草春窯さん。緑に白が映えますね。

道端で見つけた照明も、もちろん本郷焼。

「おあいなはんしょ」は、会津のことば。どうぞあがりくださいの意味。

宗像窯さんでお茶をいただきながら、ちょっとおしゃべり。



せっかくだから、宗像さんの登り窯を見せていただくことに。

わ! 迫力!! 現役の登り窯です。

かわいらしいお地蔵さまたちが帰り道を見送ってくれます。

スタート地点に戻ってきたところで、お菓子屋さんを見つけました。

お土産は手づくりの笹団子。懐かしい味でした!!